１．リスボンの空の色

リスボンには夜中に着いたのでリスボンの、というよりはポルトガルの初印象は翌朝になった。初めての朝、素晴らしい青い空が広がっていた。大分では望むべくもない鮮やかな青色である。しかし、そのどこまでも青い空の色には拭い去ることのできない哀しみが充満していた。その初印象は実はポルトガルにいる間、どこに行ってもわたしの心から離れなかった。美しい古都シントラでも、歴史の町コインブラでも、賑やかな商港ポルトの埠頭に立っても、大気の中の哀しみは常にわたしの周りに充満し、ひたひたとわたしの五感にしみこんできた。一度スペインに入り、またポルトガルに戻った時にも変わることはなかった。空の青さ、その美しさは、ラピスラズリの粉をこの国の人々の涙で溶いてからではないかと、わたしは本気で考えている。

日本とポルトガルが世界地理的には、どちらも辺境の地であることに変わりはない。ユーラシア大陸を挟んで、東の最果ての地が日本であり、西の最果ての地がポルトガルである。東の最果ての、あの今度の旅の起点にしようと訪れた原城祉ですら、三万余の人々が屠られた場所というのに、あっけらかんと明るかった。なのに西の最果てのこの国の空には、いや空だけでなく堅牢な石造りの町並みにも、海かと見まごう広い川面を渡る風にも、哀しみが充満しているのだ。それがなぜなのか。わたしはいつまでもそのことが気になって仕方がなかった。

不用意に「哀しい」と書いたが、「かなしい」には「悲しい」もある。「悲哀」「悲愴」「哀愁」、かなしいという人間の感情の動きには幾つもの言葉が用意されている。確実にこの「かなしみ」であると確信はできない。また、ポルトガルに充満している「かなしみ」はわたしを不愉快にさせているわけでもない。「哀愁の国ポルトガル」わたしはこの国のキャッチフレーズをそう命名することにした。そしてその「哀愁」の根源が何か、わたしの今度の旅のテーマがまた一つ増えてしまったが、それを探りたいと思っている。

ホテルから地下鉄をふた駅乗るとレスタウラドーレス駅に着く、そこからロシオ広場へ行き、有名なカフェー「ニコラ」で朝食をとるため、わざとホテルは朝食抜きにしてもらった。「ニコラ」は１８世紀から続く老舗のカフェ・レストランで常連客の中には著名人が多い。舗道に広がったテラスのテーブルで、ロシオ広場を行き交う人々を眺めながら朝食をとれば、わたしのような凡夫でさえ、ヘミングウエーのように傑作をかけるのではないかと錯覚できる。

朝食を終えて歩いてロシオ広場の隣、フィゲイラ広場にいく。ここにはルイス・デ・アルメイダの時代、王立医学校とその付属病院（ホスピタル・デ・トドス・オス・サントス）があった。アルメイダはここで医学生として医学を学び、研修医として患者を診察し、ここからまっすぐ河岸まで降りたところにあった王宮（現在のテレイロ・ド・パッソ）で、１５４６年、当時のポルトガル王ジョアン３世から医師免許を授与されている。

ところが彼は王立病院の医師や、出身地のリスボンでの開業医の道には進まず、１５４８年にはインド航路の船に身を委ねてしまった。１５２５年生まれのアルメイダにとって弱冠２３歳の決断である。しかも１５５２年、２７歳の彼は一人前の貿易商人として、日本に初上陸している。何が彼をして東洋に目を向けさせたのか。どうして彼は貿易商として短期間に財を成すことが出来たのか。１５４６年の医学校卒業直後から１５５２年の日

本への初上陸までの６年間が、彼にとってまさしく疾風怒涛の時期であったとは想像できるが、ではなぜという疑問はふくらむばかりである。彼は二度と故郷の地を踏むことなく、踏もうともせず、東の最果ての地、日本にその生涯をささげた。何が彼をしてそうさせたのか。わたしはもっと彼を知りたくなった。

わたしはそれゆえ、アルメイダの生地アルファーマの丘に立ち、丘の上のサン・ジョルジュ城からリスボンを見下ろし、彼が青春期を胸をふくらませて過ごしたであろう医学校跡に立ち、さらには彼がインドを目指して船出したリスボン港を水際から見れば、４世紀半も前の彼の思いに少しでも近づけると考えた。そして、そのリスボンの港はまた、フランシスコ・ザビエルにとって二度と帰らぬ旅立ちとなった場所でもあり、天正の遣欧使節としてこの地に降り立った十代半ばの少年達がヨーロッパで初めて踏んだ土でもあった。

残念ながらアルメイダが学んだ王立医学校もその付属病院も、１７５５年１１月１日にリスボンを襲ったマグニチュード８．５～９．０と言われる大地震で壊滅し、今ではその後に建てられた建物が、フィゲイラ広場を取り囲んでいる。中央には震災復興時の国王ジョゼ１世の騎馬姿の銅像があり、広場の東側の丘の上に、サン・ジョルジュ城が見える。

ホテルのそばはポンバル広場があり、中央にリスボンを大地震から復興させた宰相ポンバル侯爵の銅像が、なぜかライオンを従えて立っている。この人はイエズス会を嫌い、
イエズス会を排撃したことでも有名だ。彼自身は彼を宰相に抜擢したジョゼ１世が逝去したとたんに失脚する。復興への彼の功績は確かに大きかったが、啓蒙主義者として独裁政治を行ったことへの反発も強かったようだ。

このレスタウラドーレス広場と同じ名前の地下鉄の駅を降りると、広場の中央にこのオベリスクがある。

レスタウラドーレスとは復興者達という意味で、」１６４０年にそれまで６０年以上にわたって続いていた、同君連合という名の事実上のスペインからの支配から独立して王政復古（レスタウラソン）を成し遂げたことを記念している。